

米・ウクライナ資源共同開発協定（594号）

2025年 3月 石館

トランプ大統領は28日、米首都ワシントンのホワイトハウスでウクライナのゼレンスキー大統領と会談した。記者団を入れた会談の冒頭で激しい口論になり、予定していたウクライナの資源権益に関する協定への署名を見送った。また共同記者会見も中止した。



和やかな雰囲気が一変 口論のきっかけは米副大統領の一言 | 毎日新聞

首脳会談は冒頭、和やかに始まった。戦闘停止を仲介することに意欲を見せるトランプ氏と、自国の“安全の保障”で確約を得たいゼレンスキー氏の間には温度差があったものの、衝突は回避していた。

ところが、バンス副大統領がゼレンスキー氏を批判し

たことをきっかけに雰囲気は一変し、トランプ氏を巻き込む緊迫の応酬となった。

トランプ氏は冒頭“ゼレンスキー大統領をお迎え出来て光栄です”と切り出し、“あなた方と協力できる事を非常に感謝しています”と語った。戦争を“終わらせたい”と強調し、予定していた鉱物資源の共同開発を巡る合意に触れて“今、少し興奮しているが、本当に興奮するのは交渉がまとまり、合意に達した瞬間だ”などと語った。

これを受け、ゼレンスキー氏も“ご招待に感謝します”と語り始め“プーチンを止めるために、あなたが強い立場を取っていることを本当に頼りにしている”などと応じた。署名に向けた地ならしは整ったかに見えた。

ところが会談開始から約40分後、両首脳が記者団からの質問に答えていた

際に雰囲気が一変した。“ロシアに肩入れしすぎではないか”という質問にトランプ氏が答えた後、バンス副大統領が突然割り込んだ。バイデン前政権はプーチン氏に厳しいことを言っていたが侵攻を止められなかったと話し、“平和、繁栄への道は外交かも知れない”などと語った。

これに対しゼレンスキー氏は“聞いてもいいですかと”と切り出した。バイデン氏だけでなく、2014年以降のオバマ大統領や1期目のトランプ氏の下でも状況は変わらなかったと主張。プーチン氏は停戦の合意を過去も破ってきたとし、“あなたの話しているのはどんな外交ですか”と真意を正した。バンス氏は“あなたは失礼だ”と批判し、口論が始まった。



米国の狙うウクライナの鉱物資源

首脳会談でのやり取りをすべてここで紹介はしませんが、このような首脳会談で何故記者団も入れたのであろうか。その真意は分からぬが、多分ゼレンスキー氏がトランプに頭を下げ、資源協定の合意締結を世界に見せようとしたのではないか。

ところがバンスの発言により、話は思わぬ方向に行き、トランプは逆に思惑に反し、メンツを潰したのではないか。ただ通常大統領同士の話に、副大統領が割って入ることは考えられないが、バンスのスタンドプレイだったのか。それとも周到に準備された発言だったのか。ゼレンスキーの発言はバンスの言うような別段失礼な発言とは思われない。小生はゼレンスキーはよくぞこのようなことを

言ったと思う。トランプも大統領執務室でこのようなことを言うのは米国を侮辱している」と述べたが、ゼレンスキーは事実を述べただけでどこが侮辱しているのかわからない。大統領執務室はにこにこ笑ってただ握手する場所とは思えない。

確かにウクライナは米国の援助なしでは戦争を継続できない。しかし米国も民主主義を守るためにも大事な砦としてウクライナを支援してきたのではないか。トランプはこの支援にビジネスの感覚を持ち込んで、見返りに資源の権益を要求したのが問題を複雑にした。

記者団が退席した後政権側の幹部は、トランプに忖度したのであろうがほぼ全員一致で“大統領執務室であのような侮辱を受けた後で、物事を前進させることは不可能であり、これ以上の関与は逆戻りするだけだ”とトランプ氏に協議の打ち切りを進言したという。

ゼレンスキーの対応はあつぱれと思うが、しかしもし米国が支援を中止するということになると、ウクライナは戦闘を継続することは不可能になり、結果として国民をさらに苦しめることになり、独、英、仏などと米国との関係修復を図らなければならないであろう。プーチンはこの話の流れにほくそえんでいるであろう。



ロンドンで開かれた欧州15カ国首脳とゼレンスキーとの会合

欧州首脳たちは皆ゼレンスキーは一人ではないと励ましているが、戦闘を続けていくには、欧州が束になっても米国1カ国の

支援には足下も及ばない現実がある。欧州が策定する停戦案に米国が簡単に乗ってくるとは思えないが、今後の進展を占うのは極めて難しい。